６－８

主題	看取りケアから見えてきた、多職種連携の重要性
副題	利用者の「今」を大切にし、特養だからこそ出来る最高の看取りを目指して

キーワード 1	快感の追求	キーワード 2	夢の実現	研究(実践)期間	36 ヶ月

法人名・事業所名	社福）同胞互助会　特別養護老人ホーム愛全園
発表者（職種）	井本昭美（相談員）、宮城哲郎（介護職員）
共同研究(実践)者	中野もも（管理栄養士）、大野美波子（管理栄養士）、中村さよ子（看護師）、他

電　話	042-541-3100	ＦＡＸ	042-546-8284

事業所紹介	昭島市にある社会福祉法人同胞互助会特別養護老人ホーム愛全園は、昭和 39 年に開設されました。建物は地上二階。一階に特養 70 名、二階に特養４０名とショートスティ２２名の居室を配置し、４人部屋をメインとした従来型の施設です。同一敷地内には、高齢者に特化した複合施設があります。

《１．研究(実践)前の状況と課題》

当施設は、開設当時から常勤医師が配置されており、併設診療所があることから、住み慣れた環境の中で、利用者が最期まで生活を送ってきた。従来は当直の看護師を配置し、利用者急変時は、看護師が医師に連絡をして指示を仰ぐ、また医師が直接駆けつけて対応するという方法だった。平成２５年、看護師がオンコール体制となることをきっかけに、医師のバックアップもある中で、夜間、介護職員だけで看取りをすることになる。介護職員は大きな不安を持ち、心肺停止を発見した際は何をどうすればいいのか。また永眠後のエンゼルケアについても看護師主体であり、介護職は助手的業務しか行っていない。そんな中で、もっと介護職がメインとなり看取りを行うには、どの様にしたらよいか考えていかなければならなくなった。そんな中で、経口摂取できなくなった方々が補液のみで天井を見つめて亡くなっていく姿を見て、法人理念にもある『快眠・快食・快便・快感』の中で、特に“快感”のケアをもう一度真剣に考え、最期まで、その人らしく、家族の想いも受け止めた看取りを行うにはどうしたらいいかが課題となる。

《２．研究(実践)の目的ならびに仮説》

利用者の人生の最終段階を、どの様にしたらよいかを考える中で、その人の生まれてきた時代や背景や好きだった事、好きな食べ物、側に置きたい物や着たかった服など、入所時にもっと深く聞き取る必要があるのではないか。看取りの為に何かをするという発想ではなく、入所した時点で既に看取りも視野に入れた徹底した個別ケアを実現するためのアセスメントとケア計画の作成をすることが必要と感じた。更に、管理栄養士主導で進めているNST(栄養サポートチーム)を活用し、多職種で継続的に、利用者の『今』の希望に迅速に対応することを実践すること。また、その過程に家族も参加してもらうことで、『死』に対する家族の心の準備をしていくことも大切と考える様になる。利用者の「今」やりたいこと、食べたいもの、家族が食べさせてほしい

無断転載・複製を禁じます。

ものを提供することは、多職種で協力することで可能となる。そして、専門職集団がいる生活の場である特養こそが、在宅以上の看取りケアができる場所であると考えた。

《３．具体的な取り組みの内容》

入所時面接で本人の好きなこと、食べたいものを更に丁寧に聞き取り、ケア計画に反映。また、“夢の実現”と題し利用者全員から『今』やりたいことの聞き取り調査を実施。全員の夢の実現を行った。また終末期に関する家族の希望の聞き取りを実施。次いで、「看取りケアをするにあたって」の指針を作成し、介護職に対する勉強会を開催。医師が夜勤者用に『オンコールマニュアル』を作成。また、家族に、都度看取り期の状態を説明実施。施設内では NST（栄養サポートチーム）を活用し、毎週一回多職種で看取り期の方の居室を訪れケア方針の確認を実施。特に好きなもの、食べたいものはすぐに用意して提供を実施する。更に、介護職員の為のエンゼルケア手順書を作成。また、看取りが進む中で介護職員の精神面への配慮も考え、デスカンファレンスを実施することとする。永眠後は、正面玄関から全職員でお見送りをする対応とし、希望者には、敷地内の霊安堂にて心のこもった葬儀を上げて頂ける支援を実施。

《４．取り組みの結果》

介護職の不安が軽減出来、看取りの指針がスムーズに受け入れられ、介護職からも、「あの時、こうしておけばよかった。」といった後悔の言葉は少なくなり、代わりに「あの時こんな顔していてよかったね」「無理だと思っていたビールが飲めてうれしそうだったね」等プラスの会話が多く聞かれる様になる。エンゼルケアについても、ご遺体がまるで眠っているように綺麗に行えるようになった。介護者の不安がやりがいに変わった瞬間であった。家族からも「愛全園で生活出来てよかった」「こんなにきれいな顔で眠っているみたい」など感謝の言葉が沢山寄せられ、平成 25 年に 86%だった看取り率は、平成２８年度 96.2%までになる。

《５．考察、まとめ》

今回の研究から、利用者の『今』したいこと、食べたいものを本人、家族に常に確認し提供していくことこそ、看取りケアの準備であるという気づきを得た。施設と本人(家族)とのコミュニケーションが構築されていれば、看取り期に入ってからも、本人(家族)の気持ちに寄り添い、また多職種と共に家族にも役割を伝えていくことが出来る。そして結果的に家族が『死』を受け入れる準備が出来るのだと思われる。また、それぞれの専門職がその時に出来る最高で最善の方法を迅速に行うことで、結果悔いを残さない形で終末を迎える事が出来る様になる。看取りケアは、特養に入った時点でスタートしている。利用者の夢の実現に向けて最後の瞬間まで決して諦めてはいけないのである。その上で、多職種で連携していくことは必要不可欠である。

《６．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、本人（家族）に確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、同意を得ています。

《７．参考文献》

知っておきたい　医学知識　　（２００４）蓮村幸兌　全社協
その人らしい看取り支援業務　　（２０１５）水野敬雄　日総研出版

《８．提案と発信》

職員や家族が最後まであきらめないことが、ご本人の一番輝いた瞬間を切り抜く事が出来るのだと思います。今後も特養だからこそ出来る最高の看取りを目指していきます。

無断転載・複製を禁じます。